

令和6年度 大学・附属学校園連携事業推進経費 成果報告書

所属名	附属天王寺小学校
研究課題名	「教化と生成」を可能にする社会科教材開発～パウロ・フレイレの「意識化」に着目して～
研究課題概要	パウロ・フレイレはブラジルの教育者・思想家であり、特に発展途上国の非識字者を対象とした「リテラシー教育」で知られている。彼の教育理念は批判的教育学に基づいており、「教化と生成」の弁証法的展開を可能にするために、「意識化」と「対話」を重視した。 フレイレの提案する「意識化」は教育の目的を単なる情報の伝達に留まらず、学習者が社会の不正や抑圧を認識し、変革を促進することにおいて重要視される。これは、学習者が現実を批判的に分析し、行動する能力を育成するプロセスである。 また、「対話」はフレイレが強調する教育の重要な要素であり、教育者と学習者が双方向的にコミュニケーションし、互いに学び合う関係を形成することを推奨している。彼は権威主義的な教師と受動的な生徒という伝統的な教育モデルを否定し、対話を通じて知識を共同で構築するアプローチを提案した。 「社会的正義と教育」はフレイレの教育理論の核であり、教育が社会的変革のツールであるべきだとする信念に基づいている。彼は、教育を通して抑圧構造を解放し、より平等な社会を促進することを主張した。 フレイレの理念を実践に移す際には、学習者の自己解放を導く授業のデザインが不明確であることが課題として指摘されている。具体的には、学習の個人的側面と社会的側面をどのように関係づけ、教育内容を具現化するかが不明瞭であるという問題である。 そこで本研究では、フレイレの提案する「課題提起教育」を具現化するために佐藤（2020）の知見に基づいた授業デザインを開発した。佐藤の授業デザインは4つの視点から成り立ち、「科学的知識と生活認識を接続する教材」「生成的問いを用いて2つを接続する発問」「対話する集団の質的发展」「学習者の批判的認識の発展と学習集団の発展を含むカリキュラム計画と更新」を提案している。 佐藤の提案する授業デザインを具現化するために、本研究では、「教化」＝理解／探究と「生成」＝批判／意志決定を往還する学習過程モデルを構想し、それに基づき新たな単元構想と学習課題、教材を開発した。 学習過程モデル（コンテンツ） 学習過程モデル（コンピテンシー） 本研究では、年間を通して、上記学習過程モデルに基づいた授業を実践してきたが、特に4年生「大和川の付けかえ」の実践を詳細に検討、分析を行った。なお研究成果を分析・評価するにあたり、児童の「関心」や「理解」「批判」が顕著である第4時 学習課題「大和川の付けかえの評価」に関わる意見をAI分析を用いて要約した。以下はその結果である。 ○関心 児童は、大和川の付け替えによる洪水の減少や新たな船運業・木綿栽培の発展に注目しつつ、川の流れが変わることによって発生する水不足や米不足、村の分断による生活への影響に懸念を示している。利益と損失のバランスに関心を持っている。 ○理解 児童は、大和川の付け替えによって洪水が減り、新産業が生まれるなどの利点があったことを理解しているが、一方で水不足や米不足の問題、村の分断といった課題も発生したことを学んでいる。良い面と悪い面の両方が存在することを理解し、バランスが重要だと感じている。 ○批判 児童は、大和川の付け替えによる洪水被害の減少や新産業の発展を評価しつつ、その一方で水不足や村の分断といった問題が生じたことにも注目している。特に、どちらの選択にもメリットとデメリットがあり、全員の利益を両立する難しさを批判的に考えている。 この結果から、フレイレの理念が児童の批判的思考を促進し、社会問題に対する深い洞察を育む役割を果たしていることが示された。児童は複雑な社会的課題に対して批判的でありつつ、バランスの重要性を認識し、社会の変革につながる自己解放を体験している。この教育モデルは、学習者が個人的な立場から社会的な観点までを包括的に考察し、主体的に参加する教育環境を提供する可能性を示している。
研究課題の構成員（リーダーに※）	※森 保（附属天王寺小学校）、佐藤 雄一郎（総合教育系）